

景
Tammio
山
Kageyama
民
夫

INTO EACH LIFE,
どんな人生にも

SOME RAIN MUST FALL
雨の日はある



どんな人生にも雨の日はある

1989 年 11 月 30 日発行 初版第一刷

1989 年 12 月 22 日発行 第三刷

定価 1300 円 (本体 1262 円)

0095-890304-7417

著 者 景山民夫

発行者 目黒 実

編集者 若月眞知子

野中桃子

装丁者 吉村二郎

発行所 (株)ブロンズ新社

東京都港区南青山 4-26-6-102

03-498-3272

印刷所 三秀舎

小宮山印刷

製本所 越後堂

©1989 Tamio Kageyama

Tamio Kageyama

景山民夫

INTO EACH LIFE,

どんな人生にも

SOME RAIN MUST FALL

雨の日はある



ノボル
新社

どんな人生にも雨の日はある*目次

PART 1

- 道路の穴ぼこ…8 帰国の一服…10 最初的一本…12 そつじながら………14
原始的なほうが勝ち…16 ある午後の唇…21 僕たちが「かぐや姫」の生みの親!?!…24
小柳徹の死んだ朝…28 アドバイス…31 怪屋の怪人…35

PART 2

- 或る男、天地悠々、気骨の人…48 少年の銀座…53 1つの日にかは馬を飼いたい…57
ナサニエルとチャスラフスカ…61 普通の生活…89…65 ハーポ顛末記…71
両親は原宿に住んでいること…74

PART 3

- TRAVELIN' LIGHT…80 エアポート…89…84 イルカの日…88
コレクター…92 七人の乗客…96 彼女と僕のゲッタウェイ…100 大陸の未来派…106

PART 4

- 森とジントニック…114 炎とハイボール…116 海亀のスープ…118 夏の日汽車…121
乾いた島…123 ある過去の話…125 幕前の一杯…127 歓迎会…129 忘れないうで………131

機内までの長い道…134 そうなんだよ、ワトソン君…136 フカヒレ奇譚…139

④タクシー余談…142 マックイーン飲み…146

PART 5

ゴミばかり作ってどないするねん…150 環境破壊と深夜スーパー弁…152

トレンドは省エネ…158 新しい文化…160 僕はホント、いまの若者が怖い…164

まずは『OH! キャロル』からである…169 東京地方区分宣言…174

PART 6

それぞれの脱原発、脱ニセ文化的生活（対談：いとうせいこう）…182

愛しい男女に薦める冒険小説読書術（対談：内藤陳）…194

関東VS関西東西文化人類学（対談：中島らも）…213

千早ぶる（落語）…230

あとがき…239 初出一覧…243

写真……岩合光昭（表紙、PART 1、2、4、5扉）
内藤忠行（PART 3扉）

奥田高文（裏表紙、PART 6扉）

装丁……吉村一郎



PART: 1

道路の穴ぼこ

六本木の交差点を青信号で直進して、溜池へ向かう下り坂にさしかかったところで、ちょっとスピードが出すぎているかな、とは思ったのだ。オートバイといっても、さして速度が出るわけではない。八〇ccのトレール車だが、赤坂にあるテレビ局での構成会議の時間に遅れそうだったので、知らず知らずのうちにアクセルを開きすぎていたらしい。俳優座を通過しようとしたほんの一瞬の時間に、心の中を迷いが駆け抜けた。直進して谷町から氷川神社の方へ入って赤坂へ出るか、それとも俳優座の信号を左折して乃木坂の途中へ抜けるか。後者を選んだのは目の前の信号が黄色に変わったからだ。車体を左に倒しながら九十度のカーブを抜けた。途端に道路の真ん中の穴ボコが目飛び込んできた。アスファルトがポツコリと欠落して深さ四十センチくらいの穴ができていたのだ。急ブレーキが間に合わなかった。バイクは斜めのまま前輪をモロに穴ボコに突っ込み、一度空中に跳ね上がったから僕の足の上に落下した。

その時点ではなんの痛みも感じなかった。昼下がりの六本木だから交通量が多い。僕はあわててバイクを引きずって路肩へ寄せた。足に妙に力が入らないので倒れたままの姿勢でその作業を行った。野次馬が集まってきたが、座り込んでいる僕に声をかけてくれたのは中年のサラリーマン一人だけだ。

った。

「大丈夫なの、怪我してないの？」

僕はたぶん平気です、と答えたが、その人は僕の足を指差して言った。

「あ、それ折れてるわ。ホラ見てみな」

左足を見たら、なるほど足首から先が完全に後ろを向いていた。

「あれえ、折れちゃったか。すいませんが救急車呼んでくれませんか」

自分でも驚くほど冷静な声で僕はそう言った。まだ痛みは全然感じていなかったが、骨折のショックで冷汗が額を流れはじめていた。駆けだしていったその中年の男性は五分ほどで戻ってきてくれた。

「いま呼んだからね、すぐ来るからじっとしてゐるんだよ。交番にも言っといたから」

僕はポケットをさぐって十円玉を取り出していた。

「あの、これ救急車の電話代」

「そんなのいいんだから」と言つて、彼は立ち去ろうとしていた。

「でも、それじゃ悪いですから」と、僕は十円玉を差し出した。

「うんうん、わかった、それじゃもらつとくからね、頑張るんだよ」

そう言つて彼は十円をポケットに入れながら去っていった。で、あれから十年たつたいまでも時折考えるのだが、僕が救急車の中で気づいたように、一一九番にかけるときは十円玉がいらないことに、あの人はいつ気がついたのだろうか。

帰国の二服

若いときから結構ひんばんに海外旅行をしているのだが、三十歳ぐらいまでは日本に帰ってくるときに、それまでいた国の民族衣装を着る、という妙な癖がついていた。スコットランドから帰るときは、例のキルトというスカート状のものをはいた。アメリカも、ロサンジェルスから飛行機に乗ればウエスタンブーツにテンガロンハットですむが、シアトルからとなるとインディアンの恰好でなければ気がすまず、真冬に上半身裸で革製チョッキ一枚というスタイルとなる。馬鹿なことやってるな、と我ながら思ったが、凝り性なのでどうしてもやらずにいられない。エジプトから戻ったときは、機内であの頭に布をかぶるアラブ衣装に着替えたから、ハイジャッカーと勘違いされて一騒ぎあった。そのころは、煙草も必ず訪れている国のものを吸っていた。ところが、現地では大丈夫なのだが、飛行機が日本に近づくにつれて、いつも日本で吸っているマイルドセブンが猛烈に恋しくなるのだ。当時はまだ国際線も羽田を使っていたから、東京湾上空にさしかかるころには、もう、うわ言のように「マイルドセブン、マイルドセブン」と呟いている。入国管理を通り、税関で着ている衣装のせいで怪しまれて時間をとられ、やっとゲートの外に出ると煙草売り場に直行する。たしか、都心へ向かうリムジンバスのチケット売り場で煙草も扱っていたはずだ、と考えている。

売り場の女性はびっくりする。それはそうだ。インディアンやらアラブ人やら、そういった恰好の男が猛然と駆け寄ってきて、「マ、マ、マイルドセブンひとつ！」と叫ぶのだ。

しかし、この一服はうまい。到着ロビーの灰皿脇に立って吸うのだが、実にうまい。インディアンになつているとき、ジロジロ見る男がいたので吸いかけを差し出し「トモダチ、煙草吸ウ」と言つたが、残念ながら友情は成立しなかつた。

最初の二本

ダウンタウン・ブギウギ・バンドのデビュー曲は『スモーキン・ブギ』という題名だった。一番の出だしの歌詞は「初めて試した煙草がショート・ピース……」というもので、これは実に感じの出ている良い詞だと、最初に耳にしたときに思った。僕は昭和は二十二年の生まれで、いわゆる「団塊の世代」の真只中だが、僕たちの年代の人間は十中八、九、いやおそらくもっと高い確率で両切りピースを最初の煙草として選んでいるのではないだろうか。

そのころは、無論すでに国産フィルター付き煙草も各種売り出されていて、売り上げからいけばハイルイトがトップだったと思う。だが、それらのフィルター付きには目もくれず、両切りピースを選んだのは、幼少のころから、大人への憧れの象徴として、あの五十本入り缶入りピースを眺めてきたからではないかと思う。僕の父もピースを吸っていたのだが、十本入りの箱は、あくまでも外出時の携帯用という感じで、自宅の応接間のテーブルに常に乗せてある缶が本命だった。新しいピース缶を手にして、蓋の内側の爪を動かし「プシュ」と金属の内蓋に刺す。「キコキコキコ」と蓋を回転させて金属蓋を切り終えると、ピース特有の甘さを帯びた芳香が、もう漂ってくる。その、儀式にも似た「ピース缶開き作業」の記憶が、僕に最初の煙草として両切りピースを選ばせたのに違いない。

もともと『スモーキン・ブギ』をアメリカのシャナナというドウワップグループがカバーしてアメリカで出したときの英語の歌詞でも、“初めて試した煙草は、キャメル……”と、同じような両切り煙草を最初に吸ったのだと歌っていたから、この選択はもしかすると洋の東西を問わない、普遍的なものだったのかもしれない。

今ではすっかりフィルタ―付きに慣れてしまった僕だが、ごくたまに両切りピースの香りと味を楽しむことがある。確実に、昭和四十年代にタイムスリップすることができる。

そつじながら……

最近街で見かけなくなった現象の一つに、煙草の火を他人に借りるというのがある。昔は、いつでもせいぜい十年かそこいら前のことだが、駅のホームやバス停で必ずといって良いほど「あの、すみませんがちょっと火を拝借」と声をかけられたものだ。こちらがライターを置き忘れてきて火を借りるというのも結構やった記憶がある。

あれはなかなか呼吸が難しいものであつて、マッチなりライターなりの火を借りる場合はともかく、吸っている煙草の火を借りるには、相手の表情を読まねばならない。吸いはじめてすぐはいけない。煙草は生ビールと同じで最初の一口が一番うまいのだから、それを邪魔するのは失礼である。さりとて、あまり短くなつてからだと自分の煙草に火をつけてから相手に返すときが難しくなってしまう。返した煙草をそのまま灰皿に捨てられたりでもすれば、相手に不快感を与えてしまったのかと思うし、ギリギリ最後の一口を吸われても「あ、俺が火を借りなきゃこの人はもう二、三服吸えたんだな」と申しわけなく感じてしまう。

一番良いのは、中くらいの長さまで吸ったときに声をかけることであつて、そのタイミングをうまく見計らわねばならない。そろそろだな、と思つて煙草を取り出しながら歩み寄ると、その人は短く

なるまで吸わない癖の人で、声をかける前に揉み消してしまったりされることだってある。

そういう苦心の末に火を借りることに無事成功すると、そこにコミュニケーションが生まれるのが常だった。お礼の言葉から時事的な話題なんかに発展する。やがて、バスが来ると他人に戻って乗り込んでいく。

火を借りるという行為がすたれてしまったのは百円ライターの普及に負うところが多いのだろうが、あのコミュニケーションは悪くなかった。